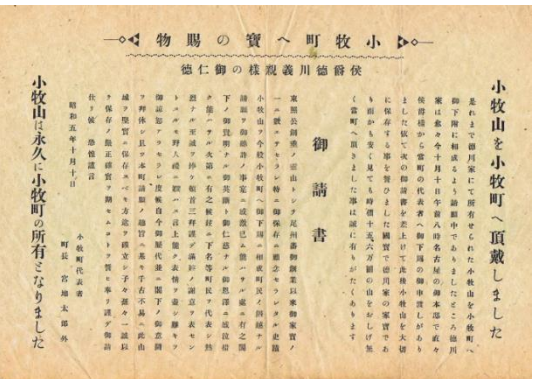




▲尾張徳川家と小牧▼

尾張藩初代・義直（よしなお）は家康の九男で、尾張、紀伊、水戸の「御三家」筆頭格として、名古屋に配置されました。
義直の時代に上街道の整備や入鹿池の築造、入鹿用水、木津用水、新木津用水が開削されました。
小牧に代官所をおいたのは九代の宗睦（むねちか）です。昭和二十八年（一九五三）、建中寺の徳川家墓地在整理され、小牧山の麓に墓碑が移されました。



▲徳川家から小牧山の寄附▼

小牧山は明治になると政府に引き渡されましたが、明治二十二年（一八八九）に再び徳川家の所有となりました。

昭和二年（一九二七）史跡に指定され、管理は小牧町に委託され町民に開放されました。

昭和五年（一九三〇）に尾張徳川家十九代徳川義親氏より小牧町に寄附されたのです。



▲八雲と小牧▼

明治維新により失職した武士の救済のため、十七代藩主徳川慶勝は、北海道の開拓を決意します。

明治十一年（一八七八）七月四日、開拓移住団の第一陣が現地に到着しました。

厳しい自然環境のなか、人々は開拓に従事し、小牧からも移住者があり、現在の八雲町へと発展します。

冬の作業として熊の木彫りが製作され、北海道の木彫り熊は八雲が発祥といわれています。

八雲と小牧は友好都市として交流を続けています。